難地名の読み方と由来

千葉県版

この地名の読みは？

（県内にある地名ですが）

答えは　　？のページに記載

上総の国いちはらの歴史を知る会

千葉県内の難読地名50選　北西部編

NO	地　名	読　み	所　在　市　及　び　由　来
1	神久保	いものくぼ	八千代市。古くは芋窪・神窪・伊毛窪と書いた。室町期は伊毛窪村、江戸期には神窪村。明治２２年に神久保地名になった。 地名の由来は、「いも（傾斜地の滑落土が崩壊した）・の（接続詞）・くぼ（窪み)」が「いものくぼ」から変化したと考えられる。
2	桑納	かんのう	八千代市。昔は官能村とも書かれた。神生・神納・神尾・神呪などを「カンノウ」と読み、各地に見られる。地名の由来は、「がけ地」などの地形からつけられたと思われる。
3	飯山満	はさま・はざま	船橋市。地名の由来は、「谷あいの場所：狭間（はざま)」からきているという説と、江戸時代では「米（飯）が山ほどできて満ちた土地」から付いた」という説もある。江戸時代には「上飯山満・下飯山満」の字があったという。飯山満の地形は、「谷上の地形」が特徴。
4	実籾	みもみ	習志野市。地名の由来は実籾は「御籾」とも書き、五穀の実や籾のことで、この地域の田畑が良く実ってほしいという願いを込めてつけられたという説と、三山（御山）と同じく二宮神社との関係から名づけられたという説がある。
5	生谷	おぶかい	佐倉市。地名の由来は、生谷の「生」を「いぎ」と発音するのは事の始まりを意味し、谷の始まる地に立地することが由来という。
6	神門	ごうど	佐倉市。江戸期は神門村。寛永末年（１６４４年）堀田正盛が佐倉に入府したころに立村と言う。地名の由来は、香取神社への要衝の地で、神の門への入り口とみられたことや、東方にあった宮本の山王神社の入口を意味したもの。転石の多いゴロゴロした土地を指したものか、または「たき（高）と（処)」の転訛で急傾斜地と（湿地)・つか（小高くなっている所)」で、小高い給料のある鹿島川沿いの湿地と言う意味
7	中尾余町	なかびょうまち	佐倉市。江戸期から。城下の武家屋敷の増加に伴い、寛文年間に造成されて成立。地名の由来は、丘陵性台地の「鞍部」を「ビョウ」と呼ぶことによる。
8	先崎	まっさき	佐倉市。江戸期は先崎村。地名の由来は「まつ（曲)・さき（突き出した土地)」で、川の曲流部と山の突き出た地形を指したものか。または「ま（接続詞)・さき（突き出した土地)」で往古印旛沼がもっと広かった頃は岬せあったことにちなむ。
9	五十土町	いかずちちょう	千葉市若葉区。雷神を祀る鎮守雷（いかずち）神社と関係があると思われる。他県にも「五十土」と言う地名がある。
１０	小食土町	やさしどちょう	千葉市緑区。元は「矢指渡」「矢指土」などの字を使っていたが、海上郡に同じ「矢指」と言う村あったので、当時村に住んでいた漢学者に相談し、「大食の者は蛮からだが、小食の者は心優しいから「矢指」を「小食」の字に変えたらどうかと言われ変えたという。また、

			「御霊神社」の碑文には、「日本武尊が東国に向かう途中、当地で休憩した際に村人が献上した間食を尊が召し上がり、この事により当地「小食土」と言うようになったと言う。「や（谷津）・さらし（曝し）・ど（処）」の転訛で、湿地のある崩壊地形と言う意味。
⑪	生実町	おゆみちょう	千葉市中央区。当初は「御弓・大弓・小弓・北小弓・北大弓・北生実・生実町となった。一時南生実町・北生実町の時もあった。地名の由来は、麻積連（おみのむらじ）とその部民が住みついたことにようで、この麻積（おみ）が「おゆみ」に転訛し、寛弘年間に源頼光が上総の国へ赴任の途中、八剣神社に参詣して「大弓」をいう漢字が充てられた。
12	登戸	のぶと	千葉市中央区。地名の由来は、名主鈴木利右衛門家の家譜に「筑波根の嵐を吹き降ろすふじの波間を及ぼり戸の船」と記されて書から形とって登戸村と名付くとある。
１３	猪鼻	いのはな	千葉市中央区。地名の由来は、下総台地から亥の方向に突き出した舌状台地があり、この地形から付いた。
１４	作草部	さくさべ	千葉市稲毛区。この地は千葉郷と同じく６世紀ころは皇室の直轄地であったと推定され、王朝時代でも相当の村落であった。三枝部の部民の居住地だったので、地名も「さきさべ」と名付けられ、それが「さくさべ」となまり、「作草部」の字が宛てられたという。
１５	園生町	そんのうちょう	千葉市稲毛区。地名の 由来は、古代薬園生または園部が居住したことによると言われる。
１６	大谷流	おおやる	八街市。鹿島川上流部の支流域で「大谷流」と「小谷流」合わせて「谷流（やる）」と言う。元は稲葉村の一部であったが、天正１９年（１５９１年）の検地の時に「稲葉」と「野流（やる）」に分かれた。その後に慶徳９年（１６１４年）に「大谷流」と「小谷流」に分村した。
１７	四木	しもく	八街市。八街町の大字の一つで、四木は江戸時代に栽培された特に重要な４種の木で、「茶（飲料）・桑（繭を作る蚕の餌）・漆（漆器・蝋燭の材料）・楮（こうぞ）（紙の材料）のこと。
１８	文違	ひじかい	八街市。八街町史によると、天正１１年（１５８３年）小間子吉田の原の戦いに敗れた椎崎城主の椎崎三郎勝任が再起を図るべく援軍を頼みに先発隊を飯櫃（いびつ）村（旧芝山町）の山室山城主の陣屋に派遣したところ、先発隊が道を間違えて飯櫃（いいびつ）村（酒々井町）に向かってしまい、当地で間違いに気が着いたと言い、道を間違えたことから「ふみちがえ」と称し、」その後転化して「ひじかい」となった。
１９	用草	もちくさ	八街市。かなり古くからある地名で、「もちくさ」とか「持草」とも書いた。中世は白井荘の内で、神宮寺に残された記録では、貞治２年（１３６３年）に秀尊が白井荘用草で大般若経を書写している。 地名の由来は、地形として「もち（川の崖）・くさ（腐）」で、川がけ下の湿地という意味と思われる。

２０	鹿放ケ丘	ろっぽうがおか	四街道市。この地区が江戸時代以降「六方野」と称していたことと、六方野から小金野にかけて、鹿狩りが行われていたことにちなむ。鹿放（ろっほう）ではどうかとの提案があり、中心地の大日権現岡の岡から囲みのない丘が採用されて「鹿放ケ丘」と命名された。
２１	南波佐間	なばさま	四街道市。地名の由来は「千葉家盛衰記」によると、文明１０年（１４７８年)、千葉輔胤の寺崎城に対し、寄手の山内上杉は陣屋を山梨村に、扇谷上杉は上野村に築き、総大将として陣を引いた上杉朝定を「南波様」と称し、それが転化してこの地が「南波佐間」となったが、なぜかは不明。
２２	廿五里	ついへいじ	市原市。戦国時代は「津比地」（つひじ)、江戸期には「津以比地」（ついひじ)、「廿五里」とも、露乾地（つゆひじ）とも書いた。 江戸期は廿五里村。低地のため、養老川洪水の被害を度々被るため移転すること二度三度はふつうであったため、昔は「漂流常なり」との伝説があった。地名の由来は、鎌倉から２５里の地にあったことにちなむ当為伝承があるが未詳。また、源頼朝がこの地の東泉寺にあった縫仏（刺しゅうの仏像）を崇敬していたが霊異を起こした為、これを治めるため毎月焼香の使いをよこした。その距離が２５里であったという。「す（洲)・ひじ（泥地)」の転化で、養老川の運んできた土砂の堆積地で、泥湿地という意味。他にも諸説がある。
２３	海士有木	あまありき	市原市。明治７年（１８７４年）に起立。もとは海士村と有木村が合併した。海士村は海辺・海とも書く。古代海士族と関係があるともいわれ、「あま」とつく地形は水辺（川・海）の崩壊した丘陵などを言う。「あば（奪)・み（水)」の転化で、水辺の地崩れ地という意味。 有木（蟻木）の地名は、戦国期からあり、戦国期末期二階堂實綱の居城の蟻木城が語源か。他にも、長谷寺のご本尊を作った稀代の霊木がある」という意味で「有木」にしたという説もある。
２４	新生	あらおい	市原市。里伝によれば、文禄年間（１５９２年～１５９０年）は新生郷と称し、のちに糸久・権現堂・十五沢を分村した。地名の由来は、「あら（荒)・う（～になっている場所)」の転化で、新たに土砂崩れで崩壊地となった所という意味。
２５	分目	わんめ	市原市。地名の由来は、「わけ（分村した子村のこと)・め（間)」で分村した子村と親村の間に位置することにちなむ。
２６	飯給	いたぶ	市原市。地名の由来は、この地の天智天皇の皇子・大友皇子が逃亡してきた際に、村人が食べ物を差し上げた。そのお礼にと皇子が「飯給」という地名を授けたという説と、同じ内容で日本武尊という説や「イビタ（木漣子）の転化で、常緑低木のある場所を指すという説がある。「いた（痛)・ふ（生)」で崩壊地という意味。
２７	不入斗	いりやまず	市原市。地名の由来は、免税地という意味で、貴族の荘園や寺社領などで貢納を免除された土地や未開拓地であったため、貢納が困難であった土地など諸説ある。
２８	新妻	にっつま	成田市。根木名側の古名は新妻川で、そこから付いたか。

２９	馬乗里	まじょうり	成田市。地名の由来は、古からの馬の産地であり、馬に関する名前という説もあるが、「ま（接続詞）・しほ（萎）・り（里）」で雨などにより浸食され次第に削られて行く地形などの地形語と思われる。
３０	取香	とっこう	成田市。古代東国の蝦夷を捕らえてトリコ（俘人の意味）として収容した地であるという説と、「鳥飼部」が居住した説がある。「とり（崩壊地）・か（処）」のされた転化で、川により浸食された地勢を指す。
３１	冬父	とぶ	成田市。江戸時代は冬父村。地名の由来は、山が崩れることを「トブ」というので、崩壊または浸食地形ではないかと思われる。また、アイヌ語で竹をトブということから、その転化で「竹の繁茂した地という意味か。
３２	酒々井	しすい	印旛郡。地名の由来は、親孝行の息子が毎日働いて父親に酒を買っていったが、ある時酒を買うお金が出来ず家に帰る途中お酒の匂いのする井戸があり、その井戸の水を汲んで父親に飲ませたら、とてもうまい酒と喜ばれたという伝説から着いた地名。
３３	四箇	しか	印旛郡。地名の由来は、埴生郡大竹村をはじめ４ケ村によって開発されたことによる地名。江戸期は「布錬四箇村新田」（ふかましかむらしんでん）で、寛文６年（１６６６年）に開発された１５村の一つ。
３４	稲荷木	とうかぎ	市川市。地名の由来は、稲を干す木の「稲木」からついた地名。
３５	国府台	こうのだい	市川市。地名の由来は、景行天皇の子である日本武尊が東夷を征伐し、その帰路に市川に浅瀬を探していると、どこからとなく一羽の白鳥が浅瀬に降り立ち、丘に翼を休めていた。それを見た日本武尊は大変喜び、この地を「鵠の台」と名付けたという。下総国の国府が置かれていた地からも付いたとも。
３６	北方町	ぼっけまち	市川市。地名の由来は、崖の意味である「ほき」が転化して「ぼっけ」となった。当地に住んでいた閉院家の呼び名が北家（ほっけ）であったから。
３７	猫実	ねこざね	浦安市。地名の由来は、鎌倉時代の大津波で大きな被害を受けた集落の人達が、豊受神社付近に堅固な堤防を築き、その上に大きな松の木を植え、今後はこの松の根を波浪が越さないように願ったことから「根越さね」と言われた。それがいつしか「猫実」と称されるようになったという。
３８	木下	きおろし	印西市。地名の由来は、竹袋村から木材を利根川におろしていたことから付いたという。
３９	発作	ほっさく	印西市。地名の由来は、「新開地」と言う意味で、「発作」とされた。手賀沼の東南部の平坦地で、寛文１１年（１６７１年）に江戸町人の手で手賀沼の新田開発が始まったが、かなり難航したという。
４０	草深	そうふけ	印西市。手賀沼と印旛沼に囲まれた台地上の地で、江戸期は「惣深」と書いていた。
４１	将藍	しょうげん	印西市。地名の由来は、この地方の開拓者の名前から付けられたと言われ、「将監川」の名前もこの地名から採用された。
４２	案食ト杭	あじきぼっくい	印西市。地名の由来は、「仁平元年たび重なる水害で飢えた人々が五

			穀神を祀って駒形神社を創建したところ、翌年大豊作となり、以降食に安ずるようになったことにちなむ。(佐倉風土記)「卜杭（ぼっくい）は「棒杭」のことで「卜」はカタカナの「卜」ではなく、トウ（占う）と言う意味です。この地は沼地で、それを長い棒杭を協会に打ち込み、土盛りをして耕作できるように開拓したという。
４３	神々廻	ししば	白井市。江戸時代の初めにはこの地名はあり、「神々迫」と書いていた。読みも（シシバサマ）でした。地名の由来は、１７紀以前のこの地域の村名を示した古文書に「志しはざま」と言う表記があり、東西南北の四方向、四至に細長い谷津の狭間がある環境を表現したものか。また「しし（猪）の狩場があったなどの説がある。
４４	都部	いちぶ	我孫子市。地名の由来は、「一の分け」と言うことで、余郷（あまりべ）を意味する。この余郷（余戸ともいう）とは、古代日本の律令制度の行政組織として国・郡・郷（里）があったが、通常５０戸で１郷単位で決めていたが、それを超える戸を余郷（余戸）と言った。
４５	日秀	ひびり	我孫子市。地名の由来は、かつては「日出」(ひいで）村と称した。平将門の死後、その魂が手賀沼を超えてこの地の大地に上り朝日を拝したことに由来する。
４６	逆井	さかさい	柏市。地名の由来は、「井戸を逆さにしたように水が良く湧き出る場所」と言う説と、不動様の水がまるで逆さまにしたように活きよいよく出ていたからと言う説がある。
４７	十余二	とよふた	柏市。地名の由来は、明治初年、広大な小金牧の開墾が進む中で生まれた地名。入植地の 12 番目の意味で「十二分の発展を未来に賭けてつけられた。
４８	三ケ月	みこぜ	松戸市。地名の由来は、鎌倉時代この地に城館を築いた千葉氏の家紋に三ケ月が含まれていたのが由来と言う。中世から「ミコツキ」・「ミコツイ」と呼ばれ、のちに転嫁して「ミコゼ」と変化した。
４９	五香	ごこう	松戸市。地名の由来は、小金牧及び佐倉牧の開墾が行われ、開墾地の入植順番に「初富・二和・三咲・豊四季・五香・六実・七栄・八街・九美上と言う地名がつけられた。
５０	名都借	なづかり	流山市。地名の由来は、地元では「天武天皇の皇子の末裔が関東に下り、現在地に借りの都を置くとした事から「名都借」と言われた。

千葉県内の難読地名５０選　　千葉県北東部編

１	行内	ぎょうじ	旭市。元飯岡町。江戸期は行内村。集落は西国漁師の進出により台地縁辺から海岸部に移転している。地名の由来は「行」は元は「垳」で「がけ（坂)・ふち（ふち)」の転訛で丘陵端部の崖沿いの地勢を指したものか。または「くだり（行)」と読み「くだり（下)」で同様の意味か、または「ひら（行)」の読みで傾斜地と言う意味の「ひら（平）は。元が「桁（かた)」であったなら「きだ（刻)・ふち

			（縁）」の転訛で浸食された崖沿いの地著言う意味に利用したことによる。
２	高生	たかおい	旭市。元海上町。江戸期は高生村。寛文10年（１６７０年）に始まる椿海の干拓によって成立した１８村の一つ。当初は後草村が親村だった。地名の由来は、「たき（滝）・おい（老い）」の転訛で、風化して崩れやすい崖・急傾斜地・浸食地と言う意味か。または「たき・おい（負い）」で背後に崖を背負った地と言う意味か。
３	萬歳	まんざい	旭市。元干潟村。江戸期は萬歳村。寛文年間（１６６１～１６７３）から椿海の新田開発によって成立、もと上代村下。地名の由来は、佳字を充てた瑞祥地名。
４	狢野	むじなの	旭市。元飯岡町。昭和２９年頃に起立。もとは三川村三川の一部。 地名の由来は、ムジナ（あなぐま）が生息していた事によるとも。 詳細は不詳。
５	郡	こおり	神埼町。もと香取郡神崎村の一部。
６	谷三倉	さくみくら	多古町。江戸期は谷三倉村。三倉村の枝郷、地名の由来は、「さこ（狭い処）・み（水）・くら（削る））の転訛で、三治部の浸食地にある砂礫地、または降雨時の浸水被害地と言う意味。
７	十余三	とよみ	多古町。明治５年８１８７２年）に起立。もとは江戸期の佐倉七牧のうち矢作牧に属す。地名の由来は、近代になり新政府が旧下総牧の開墾事業を進めた際、１３番目に開墾されたことによる。
８	南借当	みなみかりあて	多古町。「かしあて」とも言い、手とも書いた。江戸期は南借当村。 北中村の枝郷とも。地名の由来は、「膳夫（かしわて）」の子孫がいたことによるともいう。「かしわ（傾）・て（方向）」の転訛で蛇行河川に囲まれた地崩れした所と言う意味。
９	青馬	おうま	東庄町。「おおま」とも。江戸期は青馬村。地名の由来は、もと郡郷と小南郷の「合間」にあったことから「合間村」と称したが、東六郎が玉子大明神に奉納した青馬を死後「合間の駒ケ野」に葬ったことから青馬と呼ぶようになったという。
１０	羽計	はばかり	東庄町。江戸期は羽計村。羽斗とも書く。元禄年間頃（１６８８～１７０４）まで郡村と称し、石出村、今郡村、谷津村、鹿戸村、新宿村を枝郷とした。中世の郡郷の中心地にあたる。西方には桁沼を開拓した平坦地が広がる、地名の由来は、「はば（崖）・かり（崖）」で二重の崖地と言う意味。
１１	八重穂	やえぼ	東庄町。江戸期は八重穂村。地名の由来は、旧椿海開拓の結果新田立村された際、栗野村支村として栗の豊作を祝して名付けられた。
１２	返田	かやた	香取市。元佐原市。「かえた」とも。鎌倉期・江戸期は坂田村。 地名の由来は「かや（崩壊地形）・た（処）」で過去に地すべりなどによる崩壊地を指したもの。
１３	神生	かんのう	香取市。元山田町。神尾とも。江戸期は神生村。地名の由来は、加納あるいは神野の転訛と言う。「かむ（噛む）・の（野）・う（～になっているところ）」で浸食された山麓沿いの傾斜している所と言う意味

１４	桐谷	きりざく	香取市。元山田町。江戸期は桐谷村、地名の由来は「きり（切）・さく（狭処）」で山間の谷間を指したもの。
１５	九美上	くみあげ	香取市。佐倉七牧の一つで、９番目に開墾されたので「九」の美称の日に上をつけて「九美上」となったという。
１６	公官洲	こうかんず	香取市。元佐原市。公官州とも言う。江戸期は公官州新田。承応２年（１６５３年）上戸村出身の七老兵衛が起立したと伝えられる新田。
１７	笄島	こうがいじま	香取市。元佐原市。明治２２年（１８８９年）に起立。笄州とも書く利根川の中州を開墾した新開発地であり、由来は不明。
１８	石納	こくのう	香取市。元佐原市。江戸期は石納村。地名の由来は、石代納（年貢を米で納める代わりに通貨で納めること）にちなむか。
１９	鳥羽	とっぱ	香取市。元佐原市。江戸期は鳥羽村。地名の由来は「とり（浸食）・つば（潰）」の変化で浸食地を強調したものか。または「とり（浸食）は（端）」で浸食された丘陵の奥地にある地勢を指したものか。
２０	新部	にっぺ	香取市。元佐原市。新辺とも書く。鎌倉期・江戸期は新部村。地名の由来は「にい（新）・べ（辺）」の転訛で新しく出来た川辺と言う意味。利根川の流路が変動する以前は「川辺」であったと思われる。
２１	仁良	にら	香取市。元山田町。室町期は仁良郷、江戸期は仁良村。地名の由来は「にた（湿地）」の転訛で湿地と言う意味。または「に（粘土）・ら（接続後）」で、土器を作るための粘土層の土が採れた処か。
２２	丁子	ようろご	香取市。元佐原市。丁古とも書く。鎌倉期は丁古村。江戸期は丁子村地名の由来は、香取神宮祭に神輿昇丁（みこしかきちょう・神輿を担ぐ人）を出すことにちなむと言う。「丁」の字は古代朝鮮語のヨボに由来し、本来の若者の意味から満２０歳になる壮丁の呼称に転じ、これに接続語の子を付けたもので、天皇の棺を担ぐ京都八瀬童子の輿丁（ヨチョ）と同じ。「はつ（削）・ろ（袋状に入り込んだ地形）と言う
２３	龍谷	りゅうさく	香取市。元小見川町。江戸期は竜谷村。内野村野枝郷。地名の由来は「りゅう（土砂災害）・さき（谷）」で、土石流などの災害があった谷と言う意味。
２４	分郷	わかれごう	香取市。元小見川町。江戸期は分郷村。下小堀村の枝郷。地名の由来は下小堀から分村したことにちなむ。
２５	飯櫃	いびつ	芝山町。戦国期に飯櫃の地名があった。江戸期は飯櫃村。地名の由来は「うえ（上）・ひつ（棺）」の転訛で、地すべりのあった高所と言う意味。
２６	小原子	おばらく	芝山町。江戸期は小原子村。地名の由来は「おば（崖地）・く（処）」の転訛で崖地という意味か。
２７	於畿	おき	横芝光町。旧横芝町。江戸期は於畿村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。後に６村に分損した内の一つで坂田を冠称していた。地名の由来は「うぎ（浸食）」の転訛で浸食地と言う意味。
２８	尾垂	おだれ	横芝光町。旧光町。江戸期は尾垂村。天正年間（１５７３～１５９２）寛朝大僧正が勅命により成田山新勝寺本尊不動明王像を護持し尾

			垂ケ浜に上陸したと言う伝承がある。地名の由来は「お（接続詞）・たら（緩傾斜地）」で緩やかな傾斜地を指した者か。また、伝承によれば印旛沼の龍伝説の龍が天に上がった祭、天から尾が垂れていた地であることから「尾垂」になったと言う。
２９	小堤	おんづみ	横芝光町。旧横芝町。江戸期は小堤村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。後に６村に分村した内の一つで坂田を冠称していた。地名の由来は「お（接続語）・つつ（包）・み（水）」の転訛で川に囲まれた地と言う意味。
３０	曽根合	そねあい	横芝光町。旧横芝町。戦国期に曽根合に地名はあった。江戸期は曽根合村。中世坂田城主、井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。のちに６村に分村した内の一つで、坂田を冠称していた。地名の由来は「そね（水害地名）・あい（間）」で丘陵と川の間にある氾濫原地帯の砂礫地で洪水時に伏せ流水が湧き出すこともある地と言う意味
３１	取立	とりたて	横芝光町。旧横芝町。江戸期は取立村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。のちに６村に分村した内の一つで坂田を冠称していた。伝承によれば最初の坂田城主であった三谷氏は当地に倉庫を造り、のちに井田氏が守る所となったという。地名の由来は「とり（取）・たて（縦）」で、南北に伸びた崩壊・地すべりなどの浸食地と言う意味。
３２	鳥喰上	とりはみかみ	横芝光町。旧横芝村。戦国期に「鳥はみの郷」があった。江戸期は鳥喰上村。もとは鳥喰村１村であったが天正１９年（１５９１年）に鳥喰上村・鳥喰下村が分村、元禄年中（１６８８～１７０４）に当村から鳥喰新田が分村した。当地には鳥喰沼があったが明治４５年（１９１２年）に干拓工事が始まり全部が水田となり、形跡を止めていない地名の由来は、「とり（取）・くえ（喰）」の転訛で、土地が浸食され削られているという意味。または往時鶴が多く群棲していて、これを将軍に献上していたと言い、地名は将軍より賜ったとも伝えられる。
３３	母子	ははこ	横芝光町。旧光町。江戸期は母子村。地名の由来は中世横須賀城主・小積が敗戦し妻子が船で逃れた際、当地で転覆し亡くなったので子安神社が祀られたことにちなむと言う。「はば（崖）・こ（処）」の転訛で崖地を指したもの。
３４	傍示戸	ほうじど	横芝光町。旧光町。江戸期は祝示戸村。地名の由来は、上総・下総両国の境界を示す表示があったことにちなむ。
３５	宝米	ほうめ	横芝光町。旧光町。「ほうめい」とも。江戸期は宝米村。地名の由来は「奉免」」の転訛で、官物・雑事などの賦課を免除された地。
３６	虫生	むしょう	横芝光町。旧光町。江戸期は虫生村。地名の由来は「むし（峯る）・う（～担っている処）」の転訛で崩壊地を指したもの。
３７	生尾	おいお	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は生尾村。地名の由来は、昔当地を訪れた者が尻尾のない白馬に乗り通りかかった際、一夜のうちに尾が生えたので「生尾」と名付けたという。「おい（老い）・お（尾根）」で浸食された丘陵が風化している所と言う意味。

３８	蕉里	かぶざと	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は蕉里村。地名の由来は「かぶ（傾）・さと（集落）」の転訛で、傾斜地の集落と言う意味。
３９	栢田	かやだ	匝瑳市。元野栄町。江戸期は栢田村。江戸後期に東西に分村、明治９年（１８７６年）に一村に戻る。地名の由来は「かや（曲）・た（処）で、大布川の蛇行地点に位置することによる。
４０	川向	かわむかい	匝瑳市。元八日市場市。川迎とも。江戸期は川向村。地名の由来は、地域内を流れる川に面していることにちなむ。
４１	新	しむら	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は新村。地名の由来は「しんむら（新村）」の転訛で、新しく出来た村を指したものか。「しも（下）むら（村）」の略で、台地先端地を下と見立てての地名か。
４２	城下	ねごや	匝瑳市。元八日市場市。成立年代、由来等は不詳。
４３	八辺	やっぺ	匝瑳市。元八日市場市。矢部とも書く。江戸期は八辺村。地名の由来は、平安期の山上郷（やまのべのごう）の遺称地ともいう。「山上」は「山」・の（接続語）・べ（辺）」で山沿いの地方と言う意味。「矢部」は「や（谷津）・べ（辺）」で湿地になっている所と言う意味
４４	海鹿島町	あしかじまちょう	銚子市。昭和９年（１９３４年）に起立。元は銚子市飯沼の一部。地名の由来は附近に海鹿島があることにちなむ。海鹿島と言う名称は海鹿が訪れておいた事から名づけられた。
４５	犬吠埼	いぬぼうさき	銚子市。犬吠埼の地名の由来は、源義経の愛犬が銚子市大岩で主を慕い、吠えた声が聞こえた事から名付けられたと言われる。「いぬ（崖）・ぼう（そそけ立つような崖の浸食地形）・さき（岬）」で急傾斜で浸食された崖のある岬と言う意味。
４６	垣根見晴台	かきねみはらしだい	銚子市。昭和１３年（１９３８年）に起立。もとは銚子市垣根の一部で山林の無住地域であった。地名の由来は垣根長者の垣にちなむとも、かつて蠣を多く産出したことによるとも伝わる。「かき（蠣）・ね（川岸）」で、利根川に川岸が削られていく浸食地の意味。または「かき（欠き）・ね（麓）」で崩壊した急傾斜の麓の地を言う。
４７	唐子町	からこちょう	銚子市。昭和９年（１９３４年）に起立。もとは銚子市大字ロ・ハの一部。地名の由来は、唐の舟が難破し、その子供が当地に住み着いたと言う伝説にちなむ。
４８	後飯町	ごはんちょう	銚子市。昭和９年（１９３４年）に起立。もとは銚子市飯沼の一部。地名の由来は、飯沼観音の後ろ側に位置することによると言う。
４９	外川町	とかわちょう	銚子市。昭和１３年に起立。もとは銚子市高神の一部。古くは戸川と書いた。地名の由来は、川にさしかかる所と言う意味。
５０	諸持町	もろもちちょう	銚子市。江戸期は諸持村。地名の由来は「もろ（脆い）・もち（傾斜地）で、崩れやすい傾斜地を指したもの。

1	天面	あまつら	鴨川市。江戸期は天面村。天津良村とも書く。地名の由来は、県内の「あま」と付く地形は水辺（川・海）の側の崩壊した丘陵または山となっていることから、「あば（奪）・み（水）・つら（連）」の転訛で、水辺の地崩れ地が連なった所と言う意味か。
2	打墨	うつつみ	鴨川市。鎌倉期に打墨の地名があった。江戸期は打墨村。江戸初期に上打墨村、中打墨村・下打墨村に分村。地名の由来は「うつ（空）・虚）・つみ（障）」で山ひだに囲まれたうつろな地溝帯を指したものとも。「うす（憂）・み（水）」の転訛で、崩壊しやすい崖のある川と言う意味か。
3	貝渚	かいすか	鴨川市。戦国期は「かいすか村」、江戸期は貝渚村。地名の由来は「かい（峡）・すか（洲処）」で谷間の砂州と言う意味。
4	金束	こづか	鴨川市。江戸期は小束村。金塚とも書く。地名の由来は「かな（崩壊）・たばね（束）」の転訛で、崩壊地と言う意味。里見氏の埋蔵金に関係するとの説もある。
5	主基西	すきにし	神川氏。昭和 50 年（１９７５年）に起立。元は鴨川市西の一部。地名の「主基」は明治天皇が大嘗祭を行った時に北小町村字仲の坪に主基斎田が選ばれたことにちなむ。大嘗祭には悠紀濟田と主基斎田の二か所が選定される。悠紀は聖域の意味、主基は副の意味。
6	北風原	ならいはら	鴨川市。南北朝期に奈良井原の地名があった。江戸期は北風原村。元和２年（１６１６年）横尾村から分村。地名の由来は「なら（山間部の緩傾斜地）・い（川）・はら（原）」で、緩く傾斜している川沿いの平地と言う意味。
7	滑谷	ぬかりや	鴨川市。江戸期は滑谷村。地名の由来は「ぬかり（湿地）・や（谷津）」で、湿地と言う意味。
8	横渚	よこすか	鴨川市。江戸期は横渚村。地名の由来は「よこ（東西の方向）・すか（洲処）で、東西に広がる砂洲と言う意味。
9	四方木	よもぎ	鴨川市。江戸期は四方木村。もとは蓬菜（よもぎ）であったのをのちに改めたという。地名の由来は「え（手足）・もぎ（捥ぎ）」の転訛で土地の崩壊を指したもの・
１０	来秀	らいしゅう	鴨川市。江戸期は来秀村。地名の由来は「くり（抉）・ほ（山頂）の転訛で、山頂付近が崩れたことを指したものか。
１１	出水	いでみず	勝浦市。明治２２年（１８８９年）に起立。元は新宮村組替地字出水地名の由来は、湧水地から付いた。
１２	鵜原	うばら	勝浦市。江戸期は鵜原村。宇原・卯原とも書いた。地名の由来は、鵜が多く生息していた説と荊（いばら）の繁茂する地の転訛と言う説がある。「うし（憂）・はら（原）」の転訛で、浸食により崩落していく危険な崖のある平らで広い土地を指したもの。」
１３	興津	おきつ	勝浦市。古くは置津・奥津・澳津とも書いた。平安期は興津郷、戦国期は興津の地名があった。江戸期は興津村。地名の由来は古くは内陸

			から見て海寄りの地を「沖」と呼んだことによる。「津」は港の意味
１４	墨名	とな	勝浦市。江戸期は墨名村。江戸初期に新宮郷から独立して成立。地名の由来は、上古この地に春部直黒生貲（はるべあたえくろうめ）と言う者が居たことから「黒」生貲の「土」地である「名」田が短縮して「くろとな」となり、それが変化したという説と、黒土の浦の略と言う説がある。「と（山）・な（土地）」で山のある地と言う意味。
１５	部原	へばら	勝浦市。明治初年に新宮郷が当村・新宮村・沢倉村に分村。地名の由来は日本武尊の東征時に悪蛇を退治し蛇原と称したのが部原に転訛したもの。「へ（辺）・はら（原）」で海辺の広い土地と言う意味。
１６	法花	ほうげ	勝浦市。古くは法華と書いた。江戸期は法花村。地名の由来は「ほき」の転訛で急斜面や地すべり崩壊地を指したもの。
１７	実谷	みたに（じっこく）	勝浦市。地名の由来は、３つの谷の合流点と言う意味か。
１８	行川	なめがわ	いすみ市。元夷隅町。江戸期は行川村。地名の由来は「なめ（滑）・かわ（川）」で、川底が滑る川と言う意味。
１９	日在	ひあり	いすみ市。元大原町。戦国期に「ヒアリ」の地名があった。江戸期は日在村。日有村とも。地名の由来は、紀伊国日高の字体くずれで、紀伊・和泉などの上方漁民の移住を裏付けるものとの説がある。また、昔貴人がこの地を通った時、まだ太陽が在ると言ったことが地名の由来となったという説もある。「ひび（輝）・あり（有）」で亀裂（浸食による谷）のある土地と言う意味か。
２０	弥正	やまさ	いすみ市。元夷隅町。岩将・岩間狭・岩正とも書いた。地名の由来は「いわ（岩）・ま（間）・さ（狭）」で、岩の多い狭い土地と言う意味
２１	宇筒原	うどうばら	大多喜町。「うどばら」とも。宇登原・宇藤原とも書く。江戸期は宇筒原村。板谷村の枝郷。地名の由来は「うち（打）・はら（原）」の転訛で、地すべりしてできた以前よりはなだらかな広い土地を指す。
２２	小土呂	おどろ	大多喜町。江戸期は小土呂村。「小土呂七軒百姓」の名が残り、永保年間（１０８１～１０８４）には民家が７軒だったという。地内の小土呂坂は大多喜藩主・本多忠朝が大阪夏の陣出陣の際に切り開いたもの。地名の由来は「おと（落）・りょう（掠）」の」転訛で地すべり地で土石流もあった所か。または棘（おどろ）で雑草や茨の生い茂った土地を指したものか。
２３	面白	おもじろ	大多喜町。江戸期は面白村。筒森村の枝郷。地名の由来は、塗料に使う白土が採れたことにちなむとする説と、古代に天から下って来た神々が戯れ遊んで「おもしろい土地」と言ったことに由来するという説がある。「おもて（崩壊地形）・しる（湿地）」の転訛で、崩壊しやすい崖の側の湿地と言う意味。
２４	新丁	しんまち	大多喜町。江戸期は新町。大多喜城下町の一つで、江戸期は根小屋、明治５年（１８７２年）から大多喜を冠称。明治初年（１８６８年）に銭神松村を合併。地名の由来は本多忠勝が城下町設置の際、近隣の洲軽田をあげて移住したことから命名されたとも。また、新しく出来や町と言う意味。

２５	部田	へた	大多喜町。江戸期は部田村。里伝によると慶安年間（１６４８～１６５２）山中郷より分村という。地名の由来は「へ（辺）・た（処）」で川沿いの地を指したもの。
２６	百鉾	もほこ	大多喜町。「むほこ」とも。江戸期は百鉾村。笛倉村。地名の由来は「もも（河川沿岸の崖地）・ほこ（崖地・不安定な土地）」の転訛で崩れやすい河岸の崖地を指したものか。「もも・ふこ」だと河岸の地すべり危険地という意味。
２７	市野々	いちのの	長南町。市之野とも。南北朝期に一野村があった。江戸期は市野々村地名の由来は「いつ（巌）・の（接続詞）・の（野）」の転訛で、険しい山の麓にある傾斜地という意味。
２８	小生田	おぶた	長南町。南北朝期に小蓋村があった。江戸期は小生田村。地名の由来は、和名抄に小田郷があることから小田の転訛ともいわれるが、「おぶ（負う）・た（処）」で山などを背にした地という意味。
２９	給田	きゅうでん	長南町。江戸期は給田村。地名の由来は、中世荘園の給田に由来するか。あるいは寺社に供された田地「給田」の転訛か。
３０	地引	じびき	長南町。江戸期は地引村。里伝によればもとは八坂村といい、八坂に転じ、いつしか地引になったという。寺家村とも称すともいう。地名の由来は「八坂」は板の多いことを指す地名。「や（八）・いた（痛）」で小規模な崖崩れや洪水が多々あったことに指す。「地引」は地滑りなどが発生したことにちなむか。村名が変わった理由とも考えられる。
３１	米満	よねみち	長南町。江戸期は米満村。地名の由来は「よな（砂）・みち（いっぱいになる）の転訛で、三途川が運ぶ土砂が堆積することを指したもの
３２	刑部	おさかべ	長柄町。平安期、鎌倉期は刑部郷。江戸期は刑部村。地名の由来は「お（接続語）・さか（坂）・べ（辺）」で傾斜地の附近という意味。
３３	国府里	こうり	長柄町。江戸期は国府里村。地名の由来は「こおり（郡）で古代の長柄郡家（こおりのみやけ）所在地ともいわれている。または「こ（接続語）・おり（降り）」で、地すべり地を指したものか。
３４	鴇谷	とうや	長柄町。室町期に鴇谷の地名があった。江戸期は鴇谷村。地名の由来は「とうし（倒し）・や（谷津）」の転訛で、崩れる危険のある崖地の側の湿地という意味。
３５	味庄	みしょう	長柄町。江戸期は味庄村。地名の由来は、初め御庄と書き、隣接する船木と合わせて船木を産する御庄であったことによるという。中世の三崎荘を指した名称か。
３６	山根	やまんね	長柄町。戦国期は山根郷。江戸期は山根村。地名の由来は、山の麓という意味。
３７	力丸	りきまる	長柄町。江戸期は力丸村。地名の由来は「ち（場所）・から（高くなった所）・まる（運ぶ）」の転訛で崩壊地を指したものか。
３８	朝生原	あそうばら	市原市。麻生原とも書く。江戸期は朝生原村。久留里城主里見義尭の娘、種姫の夫であった正木久太郎が討死となったことから、当地の宝林寺に入り後世を弔ったと言う。地名の由来は「あさ（崖崩れ・湿

			地）・う（～なった処）・はら（原）」で、崩れるような崖のある山間の平坦地という意味。
３９	外部田	とのべた	市原市。江戸期は外部田村。地名の由来は「と（山）・の（接続語）・へた（辺処）」で、丘陵沿いの土地を意味する。
４０	櫃挟	ひつば	市原市。江戸期は櫃挟村。樋狭村とも書く。里伝によれば櫃挟間であったという。地名の由来は「ひ（ひび割れ）・つば（崖）」でひび割れたような狭い谷のある崖地という。
４１	潤井戸	うるいど	市原市。江戸期は潤井戸村。「和名抄」の湿津の遺称と考えられる。地名の由来は「うるい（湿）・つ（津）」で、湧泉地を指すもので「つ」が「と（処）」に転訛したものと考えられる。当地の南の水神谷から、豊かで清く澄んだ地下水が湧き出していたことに由来する。
４２	大厩	おおまや	市原市。大馬屋とも書く。江戸期は大馬屋村。地名の由来は「おお（美称）・まま（崖）・や（谷）」の転訛で崖のある傾斜地という意味
４３	小田部	おだっぺ	市原市。江戸期は小田部村。地名の由来は、古くは小田辺と書き、田の辺の集落が所在したことによる。「おだ（砂地）・べ（辺）」の転訛で、砂地の周辺という意味。
４４	神代	かじろ	市原市。梶路とも書く。戦国期は梶路郷、江戸期は神代村。 里伝によれば、村は古来の神地で神代の神が鎮座した当初は２３戸だけだったという。貞観１０年（８６８年）に従五位上を授けられた神代神社があり、地名の由来も神社にちなむと思われる。「神代」は「かくみ・こうしろ」とも読み、神田と同義と言われている。古来は「かわらい」とよみ、祝詞では「かみやらい」と読まれる。また「かじ（掻）・しろ（湿地）」の転訛で、過去の土石流の堆積地や崖の崩壊地のある湿地という意味か。
４５	武士	たけし	市原市。建市・武子・竹子とも書く。江戸期は武士村。地名の由来は当地に鎮座している建市神社にちなむという。建市神社を祀ったのは古代民族の高市氏（たけちし）と言われており、当地に移住し祖霊を祀ったと言い、地名となった。「たき（滝）・ち（処）」で、崖地・急傾斜地・浸食地を指したものか。または「たき（滝）・し（浸食地・冠水地）」の転訛で、崖地・急傾斜地・浸食地」で冠水しやすい土地を指したものか。
４６	大曾根	おぞね	袖ヶ浦市。もと小曽根と書いた。江戸期は小曽根村。明治８年（１８７５年）に改称。地名の由来は「お（接続語）・そね（川沿いの氾濫原地帯の砂礫地または旧河川流路跡）」で水害地名。
４７	三箇	さんが	袖ヶ浦市。江戸期は三箇村。地名の由来は、御霊台・松崎台・塚越の３村が合併したことによる。
４８	百目木	とうめき	袖ヶ浦市。古くは道米木・道目木とも書いた。江戸期は百目木村。 地名の由来は、川音などがはっきりと聞こえる土地を指したもの。
４９	堂谷	どうや	袖ヶ浦市。江戸期は堂谷村。地名の由来は「どう（百目木のどう）・やつ（谷津）で、百目木と隣接することから元は百目木の一部であり百目木の湿地という意味か。または川音まどがはっきりと聞こえる湿

			地という意味か。
５０	三黒	みくろ	袖ヶ浦市。江戸期は三黒村。地名は弟橘姫の遺骸が畔戸の浜に漂着したので、日本武尊が遺骸をこの地に運び葬らせたのでこの地を「御骸（みくろ）と呼んでいたが、のちに「三黒」と改められたという。「み（接続語）・くろ（刳）」で、川の氾濫などで浸食された地を指したものか。

千葉県内の難読地名５０選　　千葉県外房編

１	実門	さねかど	山武市。旧山武町。江戸期は実門村。地名の由来は「さ（美称）・ぬか（湿地）・ど（処）」の転訛で、湿地という意味か。
２	新泉	にいのみ	山武市。旧成東町。江戸期は新泉村。地名の由来は「にい（新居）・の（助詞）・み（水）」で、新しく開墾して出来た集落を意味する。
３	引越	ひっこし	山武市。旧成東町。元は旧松尾町引越で江戸期は引越村。地名の由来は、他の土地から自然災害などの理由で移住してきたことを表したものか。
４	武勝	むしょう	山武市。旧山武町。江戸期は武勝村。地名の由来は、苧麻（からむしで麻のこと）が繁茂する土地を意味する苧生（むしふ）の転訛だという。「むし（毟る）・う（～になった処）」で崩壊地という意味。
５	埴谷	はにや	山武市。旧山武町。半谷、埴屋とも書く。平安期は埴谷郷があった。江戸期は埴谷村。里伝によれば、元は埴屋と称したが埴谷とした。のちに横田村・奥渡村・実門村・小原村・諸木村・仲代村・寺ケ台の７村が分村し半谷と称した。文禄１１年（１６０２年）に奥渡・小原・諸木・寺ケ台の４村を合併し埴谷に戻した。地名の由来は「はに（粘土）・や（谷津）」で、粘土の採れる湿地という意味。
６	粟生	あお	九十九里町。古くは禾生・栗尾と書いた。平安期は禾生郷、室町期は栗宇郷、江戸期は粟生村。当時は上・下粟生村に分かれていた。地名の由来は、湿地という意味。
７	不動堂	ふどうどう	九十九里町。江戸期は不動堂村。地名の由来は、治承４年（１１８０年）の石橋山の合戦に敗れた源頼朝が当地に来て村名を訪ねた際、御堂を問われたと誤解した里人が「不動堂」と答えたことに由来する。
８	家之子	いえのこ	東金市。江戸期は家之子村。地名の由来は、当地に護良親王の娘（または妃）・華蔵姫（けぞうひめ）が家臣と共に逃れ住んだ場所との言い伝えがあり、姫の御所を「宮家の子御所」・「家の子御所」と呼んだことから名付けられたという伝説がある。「やの（谷野）・ね（麓）の転訛で、谷からの水による地すべり地形の麓という意味。
９	砂古瀬	いさごぜ	東金市。江戸期は砂古瀬村。砂子瀬・砂小瀬とも書く。地名の由来は南白亀川の浅瀬沿いの砂地という意味。
１０	一之袋	いちのふくろ	東金市。江戸期は一之袋村。枝郷は二之袋村。地名の由来は「いち（一）・の（接続語）・ひくど（低処）」の転訛で、一番目に開拓下低湿地という意味か。「ふくろ」は越水した場合水が溜まりやすい地で

			もある。
１１	家徳	かとく	東金市。江戸期は家徳村。享保年間（１７１６～１７３６）に幕府領の塚埼野が新田開発されて成立。地名は始め北塚新田と称したが、開発者・家徳屋佐藤次郎佐衛門の嘆願により家徳村と称したという。
１２	上武射田	かみむざた	東金市。「かみむしゃだ」とも。江戸期は上武射田村。古来は御厨であった。地名の由来は「古事記」に記載のある牟邪臣（むざのおみ・武社の国を治める役人の官職）に由来する。「みぎ（剥）・すだ（洲処）の転訛で、川の洪水時に削られた土地が堆積している地という意味か。日本武尊が東征の際、一行は安房の方から船でやってきたが、難破したため家来がこの地に住み着いたという伝承がある。
１３	求名	ぐみょう	東金市。室町期には郡名郷、江戸期は求名村。地名の由来は、家康が東金に滞在中、村人から地名の命名を依頼され、即座に「求名」と名付けたという。
１４	士農田	しのだ	東金市。昭和２１年（１８８８年）に起立。もとは豊成飛行場跡地。地名の由来は、第二次大戦後、飛行場勤務の軍人が帰農し開拓下ことにちなむ。
１５	酒蔵	しゅぞう	東金市。江戸期は酒蔵村。伝承によれば上総介平広常滅亡後、その家臣数名が土着し村を起こしたという。地名の由来は「さけ（割け）・くら（崖）」の転訛で、谷によって割かれた崖地という意味。
１６	薄島	すすきしま	東金市。江戸期は薄島村。地名の由来は「すすき（芒）・しま（土地）で、軟弱な土地という意味。
１７	丹尾	たんのお	東金市。戦国期は丹尾之郷。江戸期は丹尾村。地名の由来は「にう（丹生）」の転訛で、赤色を得る赤土の山地という意味。または「たお」の変化で古語たわ（撓）で、断層地形を指したものか。
１８	台方	だいかた	東金市。江戸期は台方村。地名の由来は台地のある方という意味。
１９	殿廻	とのまわり	東金市。江戸期は殿廻村。地名の由来は、平将門にちなむ舘をとりまく地の意味によるともいう。「たな（棚）・まわり（廻）」で棚状地の周辺という意味。
２０	道庭	どうにわ	東金市。古くは道場とも堂庭とも書いた。江戸期は道庭村。 地名の由来は「みち（地すべり）・にわ（仕事をする平らな地）」の転訛で、崩れた地を開墾した平地という意味。
２１	大豆谷	まめざく	東金市。江戸期は大豆谷村。大豆作村とも。地名の由来は「まま（崖）・さく（谷津）の転訛で、崖のある湿地という意味。
２２	三ケ尻	みかじり	東金市。江戸期は三ケ尻村。地名の由来は「み（水）・か（接続語）・しり（端）」で川沿いの地という意味か。東鑑に鞦（しりがい）の地名があり、植草・酒蔵・三ケ尻の総名という説があるが、鞦が郷名とすれば郷のうちで「川のある端の地」という意味か。
２３	御門	みかど	東金市。古くは帝と書き、のち三門とも書いた。中古は十文字領。 十文字領は旧宮村・三浦名村・御門村・高倉村・東中村・田中荒生村であった。江戸期は御門村。地名の由来は、平将門の御内墓地であったことによると伝わる。「み（水）・か（接続語）・と（処）」で、川沿

			いの地を指したものか。
２４	砂田	いさごだ	大網白里市。江戸期は砂田村。地名の由来は「いさご（砂）・だ（処）で、砂地路いう意味。
２５	神房	かんぼう	大網白里市。江戸期は神房村。もとは長柄郡の神房村（現茂原市榎神房）と１村であったと思われる。地名の由来は、日本武尊が子ノ神社に舘を造り滞在されたので「神房」というようになったという。「かん（噛）・ぼう（崖の浸食地形）」で、崖の浸食地という意味。
２６	経田	きょうでん	大網白里市。江戸期は経田村。京田とも書く。京田とは荘園地名の一種か、あるいは寺社に供された田地（給田）の転訛か。
２７	下ケ傍示	さげほうじ	大網白里市。江戸期は下ケ傍示村。地名の由来は、境界を示す傍示があったことに由来する。「さか（避け）・ぼう（浸食地）・し（場所）」で、南白亀川により土地が浸食された地という意味。
２８	四天木	してんぎ	大網白里市。江戸期は四天木村。地名の由来は、古くは四大天王像が漂着したので「四天寄」と称したことに由来するという。「よもぎ」の転訛で、崩壊地という意味か。
２９	餅木	もちのぎ	大網白里市。江戸期は餅木村。当地は神亀４年（７２６年）鎮守府将軍・大野東人が土気金城を築き、餅ノ木・金谷・南玉・池田は土気と共にその柵内五郎を成した地と伝える。「もち（小さな盆地）・の（接続語）・き（処）」で、小さな盆地地形で洪水の浸水しやすい処という意味。
３０	九十根	くじゅうね	大網白里市。江戸期は九十根村。地名の由来は「くし（崩れ）・・ふね（川端）」の転訛で、崩れやすい川沿いの地という意味。
３１	国府関	こうぜき	茂原市。江戸期は国府関村。地名の由来は「たき（高）・さき（崎）」の転訛で、傾斜地の前の地という意味か。
３２	押日	おしび	茂原市。江戸期は押日村。地名の由来は、真名を通った日本武尊がこの地訪れた時、ちょうど陽が沈もうとしたので「惜しい日だ」と申された事から「惜日」と名付けられたが、後に転訛し「押日」となったという。「おし（決壊地）・ひ（水路）」で、洪水で水害のあった地という意味か。
３３	小轡	こぐつわ	茂原市。江戸期は新小轡村。里伝によれば寛永年中（１６２４～１６４４）に本小轡村の野地を開墾して出来た新田で、寛文年間（１６６１～１６７３）に分村。地名の由来は、田村麻呂が村人から献上された轡（くつわ）を「良き轡」とほめたが、間違って「粗末な轡」の意で「小轡」と名付けた野ではないかという説と、頼朝が馬を繋いだことに由来するとの説がある。「こ（接続語）・くつ（崩）・は（端）」の転訛で崩壊地の周りという意味か。
３４	猿袋	さるぶくろ	茂原市。江戸期は猿袋村。地名の由来は「さる（地すべり）・ぶくろ（袋）」で、河川が蛇行した袋状の地形で水が溜まり易い地すべり地という意味。
３５	道表	どうびょう	茂原市。成立年代不詳。もと茂原字金谷町・昌平町の一部、高師字桂川・高瀬・茂原・正路川・高師・酒盛塚と石川向・川中島の一部。

			地名の由来は高師にあった小字をそのまま採ったもので、同地には藤原黒麻呂の墓があると言われている道標山があり、地名の由来という
３６	七渡	ななわたり	茂原市。江戸期は七渡村。地名の由来は、かつて当地は道が入り組んでおり村人は何度も道を渡って目的地に向かわなければならなかったことによるという。「なな（斜）・わだ（曲）」の転訛で、傾斜した河川の湾曲部にある湿地という意味。
３７	真名	まんな	茂原市。江戸期は真名村。地名の由来は、日本武尊が東征の際この地を通り休息した折り、村人が献上した水が非常においしかったので「これ天の真井なり」と申された事から「真井（まない）」となり転訛して「まんな」となり「真名」の字があてられたという。武尊に献上した水は東前の堰の上にある「タンタン前の清水」ではないかという説がある。「まな（接続語）・い（川）」で一宮川を指したものか。
３８	御蔵芝	みくらしば	茂原市。江戸期は御蔵芝村。地名の由来は、古くは「芝」であったが戦国時代の土気城主・酒井定隆がここに農産物を収納する倉庫を立てたので「御蔵芝」に名を改めたという。また村人が芝だけでは物足りないので「御蔵芝」と改めたともいう。「しば」は河川沿いで大洪水に冠水する所を指す。
３９	野牛	やぎゅう	茂原市。江戸期は野牛村。地名の由来は、天平の頃（７２９～７４９）、加賀国から牛を連れて来た人が移住して、牛を放牧して村を形成したという伝説にちなむという。「の（野）・うし（憂し）」で、洪水などの水害に見舞われる不安定な山麓の広い傾斜下平地の意味。
４０	弓渡	ゆみわたし	茂原市。江戸期は弓渡村。地名の由来は、伝説によると源頼朝が赤目川にさしかかった時、援軍の武将千葉常胤に弓を渡したことにちなむという。「ゆ（揺）・み（水）・わた（曲）」で、洪水で水があふれる川の湾曲部を指したものか。
４１	鷲巣	わしのす	茂原市。南北朝期に鷲栖の地名があった。江戸期は鷲巣村。文永元年（１２６４年）の開拓という。地名の由来は、氏神である鷲神社にちなむという。「わし（鷲神社）・の（接続語）・す（砂洲）」で鷲神社の側の砂洲を指したもの。
４２	北日当	きたひなた	白子町。江戸期は北日当村。もとは南日当と一村であったか。寛政５年の村明細帳によると水旱損に難儀する悪米場所で土地は砂地であると記されている。地名の由来は「ひび（皹割れ）・なた（鉈）」の転訛で、土地を南白亀川が皹のように流れる急傾斜地を指したもの。
４３	剃金	そりがね	白子町。江戸期は剃金村。曽利金とも書いた。地名の由来は「そり（長方形の土地）かね（曲）」で、南白亀川の流路が曲がっている部分に位置する長方形の地という意味。
４４	八斗	はつと	白子町。江戸期は八斗村。延宝元年（１６７３年）に大八斗村・小八斗村の呼称があった。天保年間（１８３０～１８４４）までに小八斗村新田を分村。地名の由来は、郷社白子神社のご神体の伝承から初登（はっと）と称したが、後に転訛して八斗になったという。「はり（懇）・と（処）」の転訛で開墾した地という意味。

４５	古所	ふるところ	白子町。江戸期は古所村。地名の由来は「ふる（崩壊地形）・ところ（小高い場所）」で南白亀川により削られた地にある小高い場所という意味。
４６	北水口	きたみよぐち	長生村。江戸期は北水口村。古くは妙口村と称した。慶長年間（１５９６～１６１５）以降、佐瀬一族が名主役を名乗り開拓したと伝える地名の由来は「みお（澪）・くち（入口）」の転訛で、湿地の入口という意味。
４７	一松	ひとつまつ	長生村。昭和２８年に起立。元は一松村。江戸期は一ツ松村。一ツ松郷ともいう。地名の由来は「いつ（巌）・まて（曲所）」の転訛で、一宮川に曲流により土地が削られる地という意味。
４８	船頭給	せんどうきゅう	一宮町。昭和２９年に起立。もとは長生村一松の一部。江戸期は一ツ松村の分郷村２２村のうち船頭給の地域。地名の由来は荘園制時代の職人給田の名称が残ったもの。
４９	東浪見	とらみ	一宮町。虎見とも書く。戦国期は虎見之郷。江戸期は東浪見村。枝郷に新熊村・下谷村があったが、のちに合併。地名の由来は「どろ（泥）・み（水）」の転訛で、沖合いに砂泥が堆積し泥海の名が生じたという。
５０	本給	ほんきゅう	一宮町。成立年代は不詳。地名の由来は荘園制時代の給田の名が残ったもので、免田・給田と区別するために「本給田」と称したのが略されたものか。

千葉県内の難読地名 50 選　　千葉県南部編

１	安布里	あぶり	館山市。安布理村とも書く。江戸期は安布里村。地名の由来は「雨降り」の略で、雨乞いに関係しているという。「あぶ（剥げ崩れる急傾斜地）・り（集落）」で、過去に地すべりなどの自然災害のあった所にある集落という意味。
２	出野尾	いでのお	館山市。江戸期は出野尾村。地名の由来は「いで（出）・の（接続語）・お（尾根）」で、突き出した山の尾根という意味。
３	神余	かなまり	館山市。戦国期は神余郷。江戸期は神余村。地名の由来は神戸郷の余戸が住んだことによるという。「かみ（上）・あば（奪う）・り（里）」で、丘陵が崩壊した地の集落という意味か。
４	上真倉	かみさなぐら	館山市。実倉とも書く。戦国期は実倉の地名があった。江戸期は上真倉村。もとは真倉村。地名の由来は「さ（狭）・ね（根）・くら（崩壊地）」で、崩壊した山麓の狭い地という意味か。
５	見物	けんぶつ	館山市。江戸期は見物村。地名の由来は「み（水）・もり（盛）・の（野）が（みもの）が「けんぶつ」と変化したか、海と山に囲まれた地勢を指したものか。
６	香	こうやつ	館山市。江戸期は香村。地名の由来は古代に塩海郷賀宝里（しおみのごうかほのり）と呼ばれていて「賀宝」の読みが変化して「香こう」になったという。「たき（高）・やつ（谷津）」の転訛で、急傾斜地の

			ある湿地という意味。
７	坂足	さかだる	館山市。江戸期は坂足村。酒足村とも書く。地名の由来は「さか（傾斜地）・だる（切り立った崖）」で断崖のある地という意味。
８	布良	めら	館山市。江戸期は布良村。地名の由来は海藻が繁茂する浦の意味の「布浦（めうら）」が転訛したとする説と、紀伊国の目良（めら）あるいは伊豆国の妻良（むら）の住人の移住地にちなむとする説、天富命が阿波の忌部を率いて当地に上陸した際、土民が献上した布を「良い布」と賞したことにちなむという伝承がある。「まえ（前）・ら（場所）」で安房神社の前の地という意味か。
９	山萩	やもおぎ	館山市。江戸期は山荻村。地名の由来は「やま（山）・うぎ（崩壊地形）」の転訛で、山崩れした所という意味。
１０	丹生	にゅう	南房総市。元富浦町。江戸期は丹生村。地名の由来は、丹土（辰砂しんしゃ・硫化水銀を含む鉱物）を生産した事にちなむ製鉄関連地名。
１１	久枝	くし	南房総市。元富山町。江戸期は久枝村。地名の由来は、道が崖上の地を越えていく所を指す。
１２	検儀谷	けぎや	南房総市。元富山町。昭和 30 年に起立。元は岩井町検儀谷原。江戸期は検儀谷原村。地名の由来は「くき（山）・や（谷津）・・はら（原）」の転訛で、地すべり地の平らで広い湿地という意味。
１３	平久里下	へぐりぐも	南房総市。元富山町。江戸期は平久里下村。江戸初期に平久里村が当村と平久里中村に分村して成立。「へぐ（剥ぐ）・り（接続語）」で、地すべり発生地を指したものか。
１４	御子神	みこがみ	南房総市。元丸山町。江戸期は御子神村。地名の由来は、村域にある王子神社（日本武尊）の皇子を祀る）にちなむ。または「み（水）・こ（処）・がみ（上）」で、沼沢地のある高くなっている所という意味
１５	磴森	するすもり	南房総市。元和田町。江戸期は磴森村。地名の由来は、源頼朝の愛馬「麿墨」の誕生地という伝承があり、地名も擦れにちなむという。 「す（砂）・うす（地すべり）・もり（盛）」の転訛で、山崩れの砂が堆積した事を指したものか。
１６	仁我浦	にがうら	南房総市。元和田町。江戸期は仁我浦村。地名の由来は「にが（琢）・うら（方向・場所・水辺）」で、川の氾濫や降雨時には土地が地すべりする地という意味。
１７	真浦	もうら	南房総市。元和田町。江戸期は真浦村。往古は西白渚村・布野村と一村であったという。地名の由来は「まま（崖）・うら（方向・場所）」の転訛で、地すべりする場所という意味か。「ま（接続語）・うら（入江）」で、古代は入江であったことによる箇。古代の鍛冶部である「天津真浦」に由来するとも言い、地内にある真浦神社の階段の中ほどにある大岩は「古開岩（こまらいわ）」といい、鍛冶神・天津麻羅が宿る磐座で真浦鍛冶で知られた鍛冶屋たちの信仰する氏神だという。 この事から「真浦」は「麻羅」の転訛とも考えられる。
１８	白渚	しらすか	南房総市。元和田町。江戸期は東白渚村。川谷村から分村。明治４年

			（１８７１年）に西白渚村を合併。西白渚村は江戸後期に成立した新村で、真浦村から分村。地名の由来は「ひら（傾斜地）・すか（洲処）」の転訛で、傾斜している砂洲という意味。
１９	海発	かいはつ	南房総市。元丸山町・和田町。「かいほつ」ともいう。江戸期は開発村地名の由来は「かいほつ」なら「開発」で「開拓地」を意味する地名「かい（狭）・は（端）・つ（津）」の転訛で、谷間の端の港という意味か。
２０	安馬谷	あんばや	南房総市。元丸山町。通称「あんべえ」という。江戸期は安馬谷村。源頼朝にこの地区の人々が馬の鞍馬を献上したことから付いた地名だという。「あば（地崩れ型の崖）・や（谷）」で、崩壊地の傾斜地という意味。
２１	平舘	へだて	南房総市。元千倉町。江戸期は平舘村。地名の由来は「ひら（傾斜地）・だて（南北の方向）」の転訛で、南北に延びた崖地のある傾斜地という意味か。または「へだ（辺処）・て（手）」で、海辺の地の方という意味か。
２２	葱戸	こっと	南房総市。元千倉町。江戸期は忽戸村。地名の由来は「こじ（抉）・と（処）」の転訛で、浸食地を指す。
２３	千代	せんだい	南房総市。元三芳村。千台・仙台とも書く。江戸期は千代村。付近は俗に千代っ原と呼ばれる平地。地名の由来の「千代」はもとは「川内」で「かわ（川）・うち（淵）」の転訛したものか。川沿いの地という意味。また源頼朝がこの地で馬５０騎を得て「我が家千代（ちよ）の栄をなさん」と言ったことから「千代（ちよ）」と名付けら、のちに「千代（せんだい）に変じたともいう。
２４	本織	もとおり	南房総市。元三芳村。本折とも書く。江戸期は本織村。地名の由来は「もと（側）・おり（降）」で、土砂が流れてきた所の側という意味か
２５	大帷子	おおかたびら	鋸南町。江戸期は大帷子村。地名の由来は「おお（美称）・かた（片）ひら（平）」で、片側が山になっている急傾斜地という意味。
２６	大崩	おくずれ	鋸南町。江戸期は大崩村。「おお（美称）・くずれ（崩れ）」で、崩壊地という意味。過去に土砂災害があったか。
２７	宇藤原	うとうばら	富津市。江戸期は宇藤原村。地名の由来は「うち（打）・はら（原）」の転訛で、地すべりして出来た以前よりはなだらかで広い土地を指したものか。
２８	売津	うるつ	富津市。江戸期は売津村。地名の由来は、古代の雨霑郷（うるふのごう）の違称地と推定される。「うる（潤）・ふ（＾になった所）」の転訛で、湿地という意味。
２９	海良	かいら	富津市。江戸期は海良村。地名の由来は「かい（狭）・ら（場所を示す接続語）」で、谷間の地という意味。
３０	小志駒	こじこま	富津市。江戸期は小志駒村。明治７年（１８７４年）に岩井作村を合併。地名の由来は「こじ（抉じ）・こま（屈）」で、志駒川に浸食された決壊常襲地という意味か。
３１	桜井総稱		富津市。成立年代不詳。江戸期は鬼泪山村。明治２２年（１８８９

	鬼泪山	さくらいそうしょうきなだやま	年）に鬼泪となり、昭和初期に桜井に編入されたとみられる。地名の由来は「鬼泪」は日本武尊が東征の際、阿久瑠王と戦ったが、阿久瑠王が涙を流して謝ったことから「鬼泪山」と名付けられたという。
３２	望井	もちい	富津市。江戸期は望井村。地名の由来は「もち（傾斜地）・い（川）」で、川沿いの傾斜地という意味。
３３	豊英	とよふさ	君津市。明治１０年（１８７７年）に起立。前身は倉沢村・奥畑村。豊英の地名は豊かになることを願った瑞称地名。倉沢村は江戸期からあった。地名の由来は、当村開発の恩人・里見倉沢の名にちなむ。奥畑村は江戸期からあり、由来は山奥の端の意味。
３４	平田	ひらった	君津市。江戸期は平田村。寛永９年（１６３２年）に植畑村により分村。「ひら（接続語）・た（処）」で、傾斜地という意味。
３５	釜生	かもう	君津市。江戸期は釜生村。地名の由来は「かま（噛ま）・う（＾になっている所）」の転訛で、浸食による崩壊地になっている所という意味。
３６	怒田	ぬだ	君津市。古くは沼田と書いた。江戸期は怒田村。初めは日出と称したまた泥田（ぬかりだ）村とも称した。「ぬ（沼地）・た（処）」で、湿地という意味。「ひので」は当地が東に位置することから、太陽の日の出の方向であることによるか。
３７	芋窪	いもくぼ	君津市。江戸期は芋窪村。栗坪村枝郷。里伝によると昔は迎（向）郷と称していたという。地名の由来は「いも（傾斜地の滑落土の堆積地名）・くぼ（埋められた窪み）」を傾斜地の地すべり地帯を指したもの
３８	久留里	くるり	君津市。古くは来里・玖留離とも書いた。戦国期には久留里の地名があった。地名の由来は平将門の三男頼胤が細田妙見参詣の際、城は浦田山に築き、久しくこの里に留まるべしとの御託宣があった古事に由来するという。「くる（削る）・り（里）」で、崩壊地の集落という意味。または、鹿野山に近いことから、阿久瑠王の支配地であったことの名残りか。
３９	尾車	びしゃ	君津市。江戸期は尾車村。地名の由来は古くから毘沙門天が祀られ信仰を集めたことにちなむという。「ひじ（泥）・や（谷津）」の転訛で、泥土の湿地を指したものか。
４０	草牛	そうぎゅう	君津市。江戸期は草牛村。神野寺領は惣久村、他を草久村と書いた。地名の由来は「くさ（臭）・うし（憂し）」の変化で、草が腐るような水気の多い地すべり崩壊地という意味。
４１	六手	むて	君津市。江戸期は六手村。地名の由来は日本武尊と当地の豪族阿久瑠王との戦いで、阿久瑠王の部下の手が切られ、それが６つ流れ着いたことに由来するという。「む（湿地）・て（方向）」で、湿地の方という意味か。当地は阿久瑠王の出生地で別名六手王とも称したと言い、首を埋めたという阿久瑠塚があったという。
４２	三直	みのう	君津市。平安期に三直郷（みなほのごう）、南北朝に三直郷、江戸期に三直村があった。地名の由来は「み（水）・なほ（直）」で、川が真っ直ぐ流れる地を指すか。または「み（美称）・なお（直）」で、山の

			高い所という意味か。あるいは「み（水）・の（野）・う（～になっている所）」で、水の多い山麓の傾斜地という意味か。
４３	杢師	もくし	君津市。古くは杢師・木工師とも書いた。地名の由来は「ま（接続語）・くし（抉）」の転訛で、浸食地という意味。
４４	常代	とこしろ	君津市。江戸期は常代村。常城村とも書く。地名の由来は当地に鎮座する常代神社にちなむという説がある。同社は「とこよ」と読み、地名も「とこよ」であったと思われる。「ところ（処）」の転訛で、小高い場所という意味。
４５	皿引	さらひき	君津市。江戸期は皿引村。地名の由来は日本武尊が東征の際、当地の豪族阿久瑠王は敗戦、血を引きながら帰ったため血引村と称したが、これが変化して皿引になったという。「さら（曝）・ひき（低い）」の転訛で、地すべりの低地という意味か。
４６	畔戸	くろと	木更津市。明治９年（１８６７年）に起立。江戸期は久津間新田。葛間新田とも書く。更科日記に出てくる「くろとの浜」の比定地。地名の由来は古代の郷名・倉戸によるか、または当地辺りを黒戸浜と読んでいたことにちなむか。「くら（崩）・と（処）」で、土砂が堆積して出来た地形を指したもの、または「くる（転）」で、海岸の廻った所の意味か。または「くろ（削る）」で、浸食危険地という意味か
４７	下内橋	げないばし	木更津市。江戸期は下内橋村。明治７年（１８７４年）に二階堂村を合併。当村錯綜地は現袖ヶ浦市下内橋錯綜となる。地名の由来は「しも（下）・ふち（淵）・はし（端）」の転訛で、川端の地という意味。
４８	請西	じょうざい	木更津市。戦国期に請西の地名があった。江戸期は請西村。戊辰戦争時に旧幕府軍にて活躍した請西藩主・林忠宗は当地を治めていた。地名の由来は城在・城砦と伝える。
４９	菅生	すごう	木更津市。鎌倉期は菅生荘、江戸期は菅生村。同地には平家の武人・景清の伝説が残る。地名の由来は「すご（浸食地）・う（＾になっている所）」で、河川の曲流部で水が当たって浸食する所を指したもの
５０	真里谷	まりやつ	木更津市。南北朝期は真里谷郷。真理谷・真理ケ谷・丸ケ谷・毬谷とも。地名の由来は「ま（接続語）・くり（崩壊地形）・やつ（谷津）」の転訛で、崩れ易い崖の側の湿地という意味。

表紙の難読地名**「神々廻」と「外部田」**の答えは**「ししば」と「とのべた」**です。

本冊子を作成するにあたり、「未知の駅　総フサ」及び「郷土史大辞典千葉県の地名」「日本の珍地名」を参考に作成しています。

由来の「・・・」の説明は、「マオリ語」での由来を示しています

製作･編集　上総の国いちはらの歴史を知る会

TEL　090－3545－1113